2019.12.23『埼玉新聞』全国高校女子駅伝結果

埼玉新聞スポーツ　（第３種郵便物認可）

女子13位

昌平 都大路に成長刻む

全国高校駅伝

女子　昌平の4区小松（右）が5区四元へたすきを渡す（金子拓樹撮影）

全国高校駅伝は22日、京都市のたけびしスタジアム京都発着のコースで行われ、第70回の男子（7区間、42・195㌔）、第31回の女子（5区間、21・0975㌔）ともに仙台育英（宮城）がトップで駆け抜け、2015年の世羅（広島）以来の男女制覇を達成した。男子は2時間1分32秒で12年ぶり8度目、女子は1時間7分0秒で最多に並ぶ2年ぶり4度目の優勝。

男子は2位で出た6区のディランが区間新記録の快走で首位に詰め寄り、最終7区で吉居駿が2連覇を目指した倉敷（岡山）とのトラック勝負を制した。3位には佐久長聖（長野）が入った。

女子は3区の終盤で清水がトップに立ち、その後も先頭を譲らずに2位に19秒差をつけてゴールした。2連覇を目指した神村学園（鹿児島）が2位、筑紫女学園（福岡）が3位だった。

県勢は女子の昌平が1時間9分52秒で過去最高順位となる13位に入った。1区鈴木が13位と好位置で滑り出すと、2区木下も区間10位の力走で順位をキープ。丹羽、小松の3、4区で順位を一つずつ下げたが、最終5区の四元が13位に上げた。

男子の埼玉栄は2時間5分42秒で22位だった。1区白鳥が16位でスタートすると、17位で走り出した3区佐藤が区間4位で10位まで浮上。22位でたすきを受けた5区西田が区間6位で走り順位を三つ上げたが、6区で再び後退した。＝1面参照

【経過】仙台育英は1区で小海が首位と好発進。2区で順位を二つ下げたが、3区終盤で区間賞の清水が先頭に立って逆転。4区の山中も快走し、5秒リードでたすきを受け取った木村が2位神村学園との差を19秒まで広げた。神村学園は2区シンシアが13人抜きして一時トップに立ったが、及ばなかった。筑紫女学園は4区で3位に浮上し、興譲館を振り切った。

【女子区間一位記録】
1区（6㌔）小海遥（宮城・仙台育英）19分29秒
2区（4・0975㌔）テレシア・ムッソーニ（広島・世羅）12分15秒＝区間新
3区（3㌔）清水萌宮（宮城・仙台育英）9分24秒
4区（3㌔）山中菜摘（宮城・仙台育英）9分20秒
5区（5㌔）エリザベス・ジェリー（青森山田）15分28秒

昌平の鈴木（中央）が1区で力走を見せる（石井大輔撮影）

入賞へ確かな手応え

3年連続の挑戦で目指していた初入賞には届かなかったが、確かな成長を都大路に刻んだ。

女子の昌平は初の1時間9分台（52秒）をマークし、過去最高の13位。1区鈴木が13位と絶好の滑り出しから流れをつかみ、15位でたすきを受けた2年生アンカーの四元が、2人を抜かしてゴールを駆け抜けた。浅賀監督は「強化の方向性は間違っていなかった。入賞がはっきりと見えてきた」と来年以降への手応えを語った。

「陸上はまぐれがない正直な競技。努力に比例して成長がよく分かる」と埼玉栄女子を過去に全国高校駅伝3連覇に導いた大森総監督は言う。今チームは「潜在能力をどう引き出すか」をテーマにメンタル強化。細かなことから意識を高めるために、3度行った夏合宿では「強化の方向性は間違っていなかった。入賞ね、一回一回の練習で自信をつけていった。

そこには、もちろん技術も伴う。シーズン前半はスピード7割、スタミナ3割の練習内容。8月の全国高校総体後からは割合を逆にした。短い練習時間でも緻密に練られたメニューで、難しいと言われる速さと持久力のバランスが向上した。

筆頭格が高校総体800㍍で準決勝まで進んだ年生（1時間）8分台を目指し、入賞したい」と言葉に力を込めた。（石井大輔）

コンビの秋の急成長がチームに刺激を与え2、3年生も意地で応えた。1区の3年生鈴木は「全員で引っ張っている感じ。去年より高いレベルで競い合える」と強調した。

飛躍した1年は必ず来への光となる。300㍍の自己ベストの上位3人は1、2年生だ。9分16秒75とチーム一の持ち時計を誇る木下は、来木下、丹羽。この1年生

全国高校駅伝女子成績

①仙台育英（宮城）	1時間7分0秒	
②神村学園（鹿児島）	1時間7分19秒	
③筑紫女学園（福岡）	1時間8分24秒	
④興譲館（岡山）	1時間8分41秒	
⑤青森山田（青森）	1時間8分47秒	
⑥須磨学園（兵庫）	1時間8分50秒	
⑦立命館宇治（京都）	1時間9分4秒	
⑧諫早東（長崎）	1時間9分5秒	
⑨長野（長野）	1時間9分20秒	
⑩常磐（群馬）	1時間9分22秒	
⑬昌平	1時間9分52秒	

女子昌平の区間・通過順位

区	選手名	区間順位	通過順位	
1	鈴木ひより	⑬20分3秒		
2	木下　紗那	⑩13分22秒	⑬	33分25秒
3	丹羽　遥奈	⑳10分10秒	⑭	43分35秒
4	小松　史佳	⑪9分49秒	⑮	53分24秒
5	四元　桃奈	⑩16分28秒	⑬	1時間9分52秒

1区・鈴木　エース区間で真骨頂の粘り

3年連続の都大路で初の1区を託された昌平の鈴木が、エース区間で真骨頂の粘りを発揮した。

4㌔手前で20位ぐらいまで落ちたが、「自分の得意な坂で抜かす」。残り1㌔の上り坂に苦戦する選手が多い中、盛り返し、目標タイムよりも12秒速い20分3秒の13位でたすきリレー。この奮闘ぶりに浅賀監督も「最後のガッツ。すごいね、鈴木」と、少し感極まっているようにも見えた。

さいたま与野東中時代は800、1500㍍で県大会出場がやっとで、「まさか自分が都大路で1区を走れるようになるとは…。日本一質の高いメニューで強くなれた。後輩たちには必ず8位入賞してほしい。絶対にできる」と思いを託した。